

翻 訳

## 孫鵬翁「満洲伝道会／東亜伝道会の回想」

金 丸 裕 一 訳

## はじめに

筆者は1929年以来、元・中華基督教長老会営口区会の責任董事として、中華基督教東北大会、及び東北大会理事会の各種会務活動に参加してきた。

九・一八事変の後、東北の大地は日本帝国主義の殖民地となった。本稿におけるキリスト教会の様々な活動に関する記述は、一部は直接経験したものであり、一部はその活動に関係した人々からの間接的証言に基づく。これらは将来、歴史家の参考になるだろうと信じている。筆者の学識によって、文章の正確性に限界もあるだろうが、事実になんら相違なく、読者は文言の不備を理由に意味を曲解しないでいただきたい。

## 東北における欧米帝国主義の教会を奪う

九・一八事変後、日本は欧米帝国主義に倣いキリスト教を用いて人心を奴隷化せんと躍起になった。しかし欧米帝国主義が育てたキリスト教が利用されることを拒むのではないかと懸念して、軍刀を振りかざして威嚇したのである。1932年、奉天の日本軍憲兵司令官は教界指導者と欧米帝国主義の宣教師たちを奉天〔瀋陽〕に召集して訓話を述べた。憲兵隊長は講話の際、軍刀を抜いてこういった。「これは大日本帝国皇軍の軍刀であり、敵を殺害するときだけでなく、一切の妖怪や悪魔を鎮圧する際にも用いるのだ。みなよく聞け、反満抗日などに走ろうものなら、容赦なく殺されるだろう」と。

日本軍の軍刀は、臆病で死を恐れる中国人や西洋人の宣教師たちを威嚇するに十分であったが、愛国の情に燃える中国人を怯ませることはできず、却って中国人民の強烈な抵抗を招いた。中共満洲省委員会の指導の下、東北の大地ではいたるところで抗日の烽火が燃えあがり、日本軍は寝食や生命に不安を感じる状況に陥った。切羽詰まった状況のなか、日本軍はキリスト教を利用して人心を掴もうと企てる。そこで、欧米帝国主義が切り盛りしていた中華基督教会を奪取する手段として、日本の浪人である山下永幸に三部曲を演じさせた。

## 満洲伝道会

山下永幸は日露戦争当時、日疋信亮少将率いる情報班曹長であった。専らロシア軍の情報収集の責を担い、戦後は奉天〔瀋陽〕に定住した。清末から民国初めにかけて、土匪あがり、後に帰順した第二十八師師団長の馮麟閣、旅団長の湯玉麟らと手を結び、武器販売や高利貸に従事した。張姓の未亡人から小西街の家屋を詐取し、永信洋行を設立する。武器販売を専門とし、土匪や犯罪者に銃器や弾薬を提供し、社会・治安を混乱させていた。彼はもともと、教会の宣教事業と全く無縁であった。九・一八事変後、日本軍は奉天〔瀋陽〕を占領し、悪名高き大スパイたる土肥原賢二に「治安維持会」の設立を命じ、奉天傀儡市長に任じた。彼は戦乱で苦しむ人心を掌握せんと、東北軍糧秣廠にあった大量の乾餅を利用して「中日基督徒救済会」を設立した。そして、日本基督教会長老であった山下永幸に、日本キリスト教界を代表してこの会の責任者に就くよう指令したのである。この会に参加したのものには、中国人教会の指導者でありイギリス帝国主義からの宣教師兼神学院院长 J. W. Inglis〔英雅各〕もいた。土肥原の巧みな計らいにより、山下永幸は日本キリスト教側の重鎮として中国・西洋の宣教師たちに溶け込んだ。そして縦横無尽に動き回り、日本が唱える「王道楽土」のため奔走したのである。

日本軍の意図を理解している山下は、自身の立場が不十分であることを自覚していた。「満洲伝道会」の設立は重大事であり、慎重に事を進めるべきだと悟っていた。よって先ず、東京在住のかつての上司たる日疋信亮少将と連絡を取る。協議した結果、二人は同じ企みを持つことがわかった。1904年の日露戦争当時、日疋は日本軍兵站部総司令主計少将であり、九・一八事変の時は既に退役して在野だったが、東京の日本基督教会長老であったとき、彼はこう述べた。「これまで、大陸のキリスト教は全て欧米化され、欧米思想に依存していたが、それは有害無益である。日本人は欧米化した勢力を駆逐し、日本化した日本キリスト教に置き換えなければならない」と。

山下はかかる思いを念頭に置き、日本の軍部を訪れた。軍側はこれを称讃して、彼に「満洲伝道会」設立を命じた。他にも、日疋の部下であった丸山傳太郎をこの計画に参加させた。丸山は日露戦争時、日疋の配下で通訳をつとめ、曾て日本組合基督教会で伝道にあたっていたが、1909年には中国人留学生宿舎である「翠松寮」を設立し、中国人留学生を歓待によって麻痺させ、日本による「中日親善政策」を推進した。

東京―瀋陽ラインで、日疋と二人の部下たちは共謀しながら精力的に準備を進め、1933年9月に「満洲伝道会」が東京で設立を宣言する。山下は駐満洲代表を委任された。そして彼は、中国人に向けて伝道するため、日本流の「満洲基督教会」設立に着手したのである。これに先立つ1932年12月に山下は、かつての上司である日疋信亮を奉天〔瀋陽〕に招き、「満洲基督教会」設立について協議した。その後、新京〔長春〕に赴き、表向きの理由は満洲国元首である溥儀に謁見して敬意を表するためだったが、しかし実際には背後で操る日本軍からの許可を得るためであった。許可を得た後に、山下は奉天〔瀋陽〕に戻り活動を活発化する。1933年9月15日、教会の威信を高めるべく著名な英国人宣教師の T. M. Baker〔柏基根〕と中国人劉国華（西関教会牧師）を特に招聘する。新任の葛延芳牧師は神学に不慣れであり、人々の期待に応えられないかも知れ

ないと懸念したため、劉国華が名誉牧師を兼任した。こうして、奉天駅前の平安通（和平区）に「満洲基督教会」が誕生したのである。日正が司式した設立大会の席上、山下は得意満面にこう語った。「今日は満洲基督教会の誕生日である。実は、満洲基督教会は早くも日露戦争当時に構想されていた。その頃、日正信亮長老はわたくしとともに満洲人に福音を宣べ伝え、教会を設立しようと決意したのである」。彼は、眼前の小さな講壇を指さして続ける。「これは当時、教会を設立する準備として用意したものである。わたくしは30年も保管し続けた。今日のはじめて『満洲基督教会』のために用いることは、極めて意義深いことだ」と。この言葉こそ、キリスト教を利用して中国を侵略せんとする彼等の企みが、長年にわたって暖められていたことを計らずも明かすものだった。

最初の「満洲基督教会」成立の後、日本の魔手は満蒙各地へと伸びて行き、教会も濫立した。支配を容易にすべく、やがて三つの教区に区分される。第一教区—南満教区は、長春以南の大連に至るまでの教会を管轄し、山下が教区長となる。第二教区—北満教区は、黒龍江省の教会を管轄し、吉持久雄が教区長となった。第三教区—蒙古教区は、「特別市教区」と見做され熱河の各教会を管轄し、福井二郎が教区長となった。福井二郎は1920年に上海の東亜同文書院を卒業している。この学院は日本軍国主義が中国を文化侵略するための道具であり、卒業生の多くは洋行社員、日本軍憲兵守備隊、討伐隊通訳などを務め、中国人民の累々たる血債を負っている。福井はかかる学校を畢えて「支那通」と讃えられた。1935年、「満洲伝道会」によって選ばれ、満洲伝道に派遣された。彼は神学を修めておらず、キリスト教の教規により「牧師」に按立されることはできない。だが日本は頑なにも山下永幸に教規を破って「牧師」として立てるように指示、1937年6月17日に「満洲伝道会」は日本基督教会牧師を派遣し、承德において福井二郎を「牧師」に按手した。このようにして福井二郎は「牧師」の外套を羽織り、日本の侵略政策により直接的に加担したのである。彼はアメリカ帝国主義によって運営されていた赤峰・圍城・巴溝などの教会を奪取し、更には盖県・奉天〔瀋陽〕などの教会でも説教を行い、その機会を利用してスパイ活動を行った。

福井に随伴した人員の中には、日本の手先だった沢崎がいた。彼は熱河に住み、蒙古語を学んでいた。そして「伝道」を隠れ蓑にしながら、到るところで八路軍の情報を集め、様々な悪行を働いたのである。

### 東亜伝道会

1937年7月7日の盧溝橋事変後、日本軍は中国本土に全面侵攻した。日本軍の武力侵攻にとともに、民心を麻痺させるためのキリスト教に対する要求もおのずと高まって行く。そもそも「満州の王道楽土」のために奉仕していた「満洲基督教会」は、既に時局の要請にこたえられなくなっていた。山下と日正の画策により古い手法が踏襲される。すなわち「満洲伝道会」は「東亜伝道会」に改組され、それを弾みに軍事的侵略と矛先を合せて、全中国に対する侵略の先鋒となしたのである。

山下と日正の謀略は、日本の陸軍大臣であった荒木貞夫に絶賛され、日正は「東亜伝道会」会

長に任命された。同時に、ハイレベルな知識人である早稲田大学工学博士の山本忠興が副会長、「政客」たる衆議院議員の松山常次郎が理事長、「財閥」資本家の大江与四郎と直野視一、及び基督教青年会の菅儀一、衆議院議員の何某などが賛助者となり、日疋の旧部下であった「満洲伝道会」の丸山傳太郎もそこに名を連ねた。

「東亜伝道会」の設立により、既存の満洲各教区に加えて、新しい教区も設けられた。(1)蒙疆教区では、魔手が張家口・大同・厚和(綏和)・包頭に向けられた。(2)北支教区は、北京・天津・青島などである。(3)中支教区は、南京・崑山・漢口などであった。(4)南支教区は、厦門・汕頭・海南島などであった。ここからも判る通り、これは日本帝国主義が中国を侵略する手段だったのであり、日本は軍刀で道を切り拓いた後、キリスト教がそれに続いた。武力と精神的阿片を以て、彼等による「大東亜共栄圏」を築こうと謀ったのである。

### 満洲基督教聯合会

日本側の策略にともない、侵略の道具たる日本化したキリスト教会が、中国各地が立ち上ってきたものの、枠組だけで内実をとまなつてはいなかった。看板は掛けられたものの、軍刀の力を借りたのであるから、信徒数は非常に少なかったのである。これでは懐柔する対象を失い、キリスト教を侵略の道具として用いる意味がなくなる。山下たちはこれを鑑みて、英米が既に持っている教会を手中に収めようと画策したのだ。

山下は上述の施策を実現すべく、慎重に事を進め、ゆっくりと深めて行った。それは、「飴と鞭」とを使い分けたものである。まずは謙虚な姿勢を装いキリスト教界上層部の人々を懐柔し、親密な関係を構築した。1935年春、彼はキリスト教各会派の人々を組織した日本視察団を引率する。参加者には、安東(丹東)からデンマーク・ルーテル教会牧師の陳景升ら、四平街からカナダ長老教会牧師の姜楽亭ら、長春からイギリス長老教会牧師の胡成国、及びイギリス留学経験がある高光達、郭玉衡ら、ハルピンから北満基督教会(親日派がデンマーク教会から分裂した自立会)牧師の李毓麟、「満洲伝道会」傘下にあった瀋陽教会牧師の葛延芳、大連教会の王作光牧師などがいた。山下は用心して察知されないようにしたが、その一端は看取されるだろう。彼はこれらの人々を、親日派は更に親日に、親欧米派は徐々に親日に転向させて、日本の侵略者のために働かせることを狙ったのである。

ついで1935年秋には、「反満抗日」の罪名を以て、多くの親欧米派キリスト教界エリート層を逮捕した。その中には、東北大会宗教教育幹事の高光達、長春長老会牧師の胡成国、東北大会総幹事で奉天[瀋陽]の莊振聲、奉天[瀋陽]西関教会牧師の劉国華、基督教青年会会員の劉仲宜、基督教盛京施医院医師の畢天民と劉仲明、更に神学院の張尚民と牛光朴などがいた。継いで1936年には、曾てイギリスに留学していた奉天[瀋陽]文華中学校校長の郭玉衡らを逮捕した。彼等は獄中でファシスト連中からありとあらゆる拷問を受け、獄死した者すら出現したのである。

この時、仲介役の山下は善人を装って奔走し、様々な悪だくみを行った。被害者たちの自宅を何度も心配そうに慰問に訪れたうえ、獄中での面会や差し入れの手配をするなどしながら、実情の把握に努めたのである。

時を同じくして、日本側は満洲全土におけるキリスト教各会派の名称を改めた。まずは1934年8月に、元々の「中華基督教東北大会」から「中華」の二文字を削除したうえで、「満洲基督教長老会大会」と改称された。1935年3月には、「基督復臨安息日会東北聯合会」を「基督教復臨安息日会満洲聯合会」と改めた。同年9月には、「信義会東北大会」を「満洲基督教信義会」と改め、上海の総会との関係が断絶したことを示した。以前は、帝国主義によって操られていたものの、名目上は中華基督教国内佈道会によって成立した黒龍江省各地の自立教会も、前後して「中華」の二字が削られて「満洲」に置き換えられ、「北満自立会」と改称された。その他の会派で元々「中華」の文字が含まれないもの、例えば神召会・浸礼会・救世軍なども、「満洲」を冠せられてしまう。東北地方では、全ての教会が名称の上で「満洲」を冠した「満洲基督教会某々会」となり、満洲基督教聯合会の基礎が固められたのであった。

山下は、「満洲基督教聯合会」の誕生を促進すべく、様々な裏工作を行った。1936年7月、東北大会第26回会議の機会を利用して、山下は日本基督教聯盟総幹事の海老澤亮を奉天〔瀋陽〕に招聘し同会での「靈的講話」を担当させた。海老澤の地位を利用して、「誕生促進」のための準備を整えたのである。会議後、海老澤亮と山下は新京〔長春〕に赴き、傀儡政府が召集した全満キリスト教各会派首脳座談会に出席した。この座談会で山下は、日本の軍部と傀儡政権から許可を得たので、「満洲基督教聯合会」を組織すると宣言した。海老澤はこの機会を利用して、日本基督教聯盟という組織が持つ意義を、こう説いた。「この組織は、各会派間の調和と協力、及び合作を計るものであり、キリストに在って一体となり、キリストのために栄光を増すものである」と。明らかに、満洲キリスト教各会派もこれに倣って聯合会を組織する必要性を暗示した内容であった。

1936年12月1日、奉天〔瀋陽〕基督教青年会において「満洲基督教聯合会」成立大会が開催された。この組織はもともと山下一人が請け負って成立したのであるが、威信を高めるべく胡成国（英国長老教会）、Johannes Olaf Rasmussen〔華茂山〕（デンマーク人のYMCA）、羅培生（英国聖書協会）、張海雲（ハルピンの米国メソジスト教会）と賈恩高（大連ルーテル教会）らが準備委員として動員された。開会式には、東北地区の凡ての会派が殆んど参加した（当初、幾つかの小会派は誰も出席しなかったが、後に次々と加盟を申請した）。12組織から18人の代表が出席したこの会議では聯合会の規約が承認され、胡成国や陳景升など12名の理事が選ばれ、胡成国を理事長、J. W. Findly〔方徳立〕（イギリス人宣教師で東北神学院院長）と李毓麟（北満自立会）の二人を副理事長に選出した。実権を掌握する総幹事は山下みずからが担い、高光遠と Johannes Olaf Rasmussen〔華茂山〕が幹事となる。「満洲建国の精神は、宗教的かつ教化上の責任を尽くすことが必要であり、……日本あるいは同種（黄色人種）の諸団体と連携を計り、共通の事項を協力して審議し、共同事業を計画し、かつ適切な方法でこれを行うため」の組織であることを宗旨とした。山下はなんら疑いを持たぬが如く、群衆に向けて宣言した。「いまこそ歴史の転換期であり、過去300年に互り人心を支配した自由主義の旧体制を放棄し、全体主義へと向かうべき時である。われら日満華三国は、全力を一致させて共に新しい大東亜共栄圏建設の大業を成し遂げなければならない。キリスト教も凡ての力を合わせて、聖書が教えるところの全体主義を、新しきこの時代に提起して貢献しなければならない」と。このために彼は、何度も東北地区の牧師たちを動員して「この新しい時代」のために説教用の『新講章』を編集し、『講道集』を出版した。そして1939年には、

『基督徒靈修日課』、『福音精華』などを発行した。

### 親日派人士の養成

「満洲基督教聯合会」総幹事となった山下は、英国宣教師の T. M. Baker [柏基根]、西関教会牧師の劉国華、「満洲基督教会」牧師の葛延芳らに請い、奉天站前にあった「満洲基督教会」で「牧師」として立てられた。彼は「牧師」という外套を纏ったのち、みずから擁する教会を地盤に大発展を遂げた。おのれに仕える親日人士を養成すべく、手始めに満洲人牧師らを組織していわゆる友邦日本へ観光や訪問、見学に派遣した。

1937年4月1日から24日にかけて、山下は再度「満洲基督教代表团」の胡成国・劉国華など14名の日本視察団を引率した。1938年10月には、英国宣教師の T. M. Baker [柏基根] と新京 [長春] の牧師である金玉清を東京に派遣し、英満両国教会を代表して「日本基督教会全国大会」で祝辞を述べさせた。1940年に山下と胡成国は満洲基督教会を代表して皇紀二千六百年を奉祝すべく日本基督教団が挙行した式典に参加した。

1941年4月には、馬福江と王子眞を含む8名を日本の東京・青山学院が主催した「東亜基督教講座」に派遣して研修させた。この講座は70日余り(4月16日から6月26日まで)も続いた。神学課程を名目にしながら、「大東亜新秩序」や「唯神之道」,「神社参拝の国民儀礼」などを宣伝したのである。また、日本のいわゆる優れた文化、近代的文明、摩天楼建築などを称賛すべく、何回かの課外活動も企画されていた。大東亜講座では「日本は極東の幸福と平和、そして文化復興を指導・推進する新たな使命を担う」ことや、「東亜は日本の指導に服従すべき」こと、「日・満・華は同文同種であり、一徳一心たるべき」ことなどが盛んに宣揚された。いわゆる「神学講座」では宗教的タームの「蔽い」さえ剥がされ、日本帝国主義の侵略に奉仕せよとの醜悪な素顔が赤裸々に露呈したのであった。

日本はまた、留日学生を送り込む方法を用いて、「日本キリスト教」の奥義を理解し、日本の侵略政策に奉仕するに相応しい人材を養成せんとした。

1938年8月、山下と英国宣教師の画策の下、この頃は奉天 [瀋陽] 西関教会の伝道員であった李廷奎が選抜され、東京の長老教会神学校に留学した。これとて親日派中枢の育成を通じて、満洲人のなかで「日本通」を育てる狙いがあった。同時に、英国人宣教師の Wm. Scott. Morton [馬思德] も選抜されて東京での日本語研修に派遣されたが、これは日英関係の円滑化と緊張緩和を名目とした、「日本通」親日派英国人を養成するためだった。

1940年、T. M. Baker [柏基根] と東京基督教青年会総幹事・齋藤惣一の縁により、長春佈道幹事の王育才が東京 YMCA 同盟に派遣されて研修を受ける。1941年8月には、遼陽伝道員だった王錫坤が東京の聖教会聖書学院での実習に派遣されている。

山下自身はといえば、南満教区長として所轄する各教会は事実上名ばかりの空虚な存在であり、信徒獲得ですら苦勞していた。1934年に成立した「大連満洲基督教会」の信徒数は寂寥たるものに過ぎず、牧師の王作光はそれを苦に引退した。山下は王作光のような親日の人物を失う事を潔しとせず、「七七事変」後に復帰を要請した。1938年9月、山下は王作光を伴い東京へ出向き日

正信亮ら「東亜伝道会」幹部と面会した。そして、王作光が帰国後に山東省済南に「中国基督教団」を設立して、宣撫に従事するよう依託した。王作光は済南に到着後、全土に広がる抗日の烽火、とりわけ山東の八路軍が絶えず日本軍に深刻な打撃を与えていることを鑑み、状況は絶望的であると判断して青島・大連に撤退、名目だけは済南にある教団の牧師職を引き受けたのであった。

### 欧米の教会が運営する教育事業に伸びた魔手

日本はこうして一歩ずつ地盤を獲得した後、欧米の宣教師たちが運営する教育機関に食指をのばした。まずは神学校に手を伸ばし、神学生たちに「日本化」した神学思想を植え付け、将来は「日本化」した神学思想を持つ伝道者に育てようとした。英国の宣教師は縄張りを守るため、まず奉天〔瀋陽〕の日本基督教会牧師を東北神学院院長に招聘し、奉天〔瀋陽〕の日本組合基督教会牧師の渡部守成、日本聖教会牧師の平野一誠を神学教師に任用した。日本は神学校における主導権を掌握した後、策略をめぐらせて東三省各地に散在した欧米人宣教師が経営する学校を接収した。「国民儀礼」を遵守しないことを口実にしたのである。

1939年秋の開学時、営口市の「協和会」は英国人宣教師 J. McCommon〔康慕恩〕が経営する培真中学に神社「参拝」を通達したが、校長たちは信仰に抵触するとしてこれを拒んだ。傀儡側の教育機関は、「神社参拝を行わぬなら合法的な学校と承認できない」とし、新聞各紙に「英国人は宣教を名目に教育を行い、満洲国の建国精神にも服従しないので、活動停止を命令する」と発表した。その後、聖書学院、学道館、懿徳小学校、奉天文華中学校、開原文光小学校など8校が活動停止を命じられる。これら小中学校の建物と設備は名義上傀儡政府に売却された。奉天〔瀋陽〕坤光中学校、新民文会中学校、安東のデンマーク系三育中学校も、相次いで閉校した。これと前後して、一部の中学校は日本人を教員に採用して保身を計ったのである。

### 山下永幸の後継者・石川四郎

太平洋戦争勃発後、戦争を仕掛けた日本軍は、抜け出る事が適わぬ潰滅の渦に陥っていた。とりわけ日本軍が依り頼む聯合艦隊とその司令長官であった山本五十六が南方の海戦で散り、山下の息子も戦死した。もはや絶望的な状況であると察した山下は、財産を守るため教会の存続など度外視して、奉天〔瀋陽〕站前と鉄西にある二箇所「満洲基督教会」を含む不動産、及び私財を全て売却した。そして、家族と持ち物を携え、大連経由で帰国する。大連に到着した際、王作光は彼に土地を購入して定住するように勧めたが、微笑むだけで何も答えなかったという。

山下の後継者であった石川四郎は、日本の陸軍大学校卒業生であるが、病弱のため軍務に就くことができず、新京〔長春〕の日本基督教会牧師を務めていた。彼は関東軍司令官だった梅津大将と同級生であり、満蒙を侵略する事業について、お互いに深い理解と暗黙の了解を共有していた。どうりで、日本軍による真珠湾奇襲後、東北地方の欧米宣教師たちは悉く奉天〔瀋陽〕の収

容所に幽閉されたわけだ。後に、日本軍当局は日本にいた石川を登用して、ただちに満洲に戻るよう指示し、山下永幸が企てたキリスト教を用いて文化侵略の道具とする未完の事業を継承させようとしたのである。石川はただちに新京〔長春〕に戻り、「満洲基督教会」、及びそれに附属する事業の接収に奔走する。

石川は、満洲基督教聯合会会長、東北大会総幹事で長春教会牧師であった胡国成を、1941年12月17日に奉天〔瀋陽〕より新京〔長春〕に招聘し、東北大会を召集した。奉天〔瀋陽〕にいた関係者である王凱や李廷奎たちは長老会東北大会「教務会」を「臨時措置委員会」に改組することで合意した。会議では石川四郎が会長に推挙され、東北大会を代表して傀儡満洲政府との連絡調整や処理を行う全権が与えられた。12月31日、石川は李廷奎（通訳）を伴い滙豊大樓収容所を訪れ英国人宣教師 John Stewart〔邱樹基〕、及び J. W. Findly〔方徳立〕と面会し、合意が成立した。全ての教会・福音堂・学道館など宣教事業に関わる建築物や土地など、イギリス系の「宣教部」名義で登記されたものが全て「満洲基督教長老会」所有に改められたのだ。宣教部が現有する公金は悉く満洲基督教長老会の「臨時措置委員会」に移管された。移管された公金は満洲国幣で57万3866元9角4分に上り、その大部分を石川が横領した。

1942年2月15日、会長の石川四郎は布告を発表する。東北の各教会に対して「宗教報国の精神を堅持して、聖戦の早期完遂を祈願」し、「宗教思想によって我国（傀儡満洲国）の建国精神を涵養する」ことを求めたのである。また、キリスト教徒に対しては「友邦と手を携えて大東亜共栄圏において他者の模範となるような理想国家を築く」ことを要求した。つまりは、日華・日菲・日泰関係なども日満の「一徳一心」に倣い、日本軍国主義の統治に服従せよという要求であった。

### 満洲基督教会本部

1942年3月27日、新京〔長春〕西五馬路教会に「満洲基督教会本部」が設立された。東北キリスト教の19の会派（基督教復臨安息会は除外）が合併され、8つの教区に分割され、本部は新京〔長春〕に置かれた。奉職した人々は、次の通りであった。(一)胡成国を会長に任じ、陳景升・張海雲は副会長に就く。(二)王荊山は財務部長をにない、(三)王子眞が伝道委員会会長、(四)医療委員会会長は崔毓宇（長春教会医院院長）、(五)宗教教育委員会会長は潘昨非（東北神学院教員）、(六)厚生委員会会長は張海雲が兼任し、(七)出版委員会会長は王凱、(八)石川四郎は総務部部長をつとめ傀儡組織を操り、大権を掌握した。中野佐武郎・平尾栄は本部幹事となり、奉天〔瀋陽〕に駐在した。「満洲基督教会本部」の設立は、機構を強化して満洲各教会の統治を容易にすることにより、「聖戦」に利する目的を持っていたのである。

この他、教会に附属した医院・学校・聖書協会・男女基督教青年会・神学院などの事業も厳しく管理されるようになった。

「満洲基督教会本部」は、五つの統合を実施した。すなわち、(1)組織の統一であり、元々は欧米系だった多数の教派を合同させて、「単一の日本化された」「満洲基督教会」とした。(2)指揮の統制であり、各会派に対して指令を発する機関を「満洲基督教会本部」に統合、中央集権と一元化した指令を行った。(3)信仰の統合は、以前のキリスト教各会派の教義・儀式・教規を「日本長

老派式」に改め、「日本化したキリスト教」による信仰の一致を実現させようとした。(4)思想の統一として、キリスト教各会派の思想を「唯神之道」思想のうちに落とし込んだ。「天照大明神」は日本建国の神であり、天皇はその末裔であるから、一切の宗教神は皆が天照大明神の下にあり、一切の宗教は皆が天皇の政府による統治を受けるべきであるとした。(5)行動の統一として、日本軍による侵略政策のあらゆるスローガン、例えば「献納」や「報国講演」などをそのまま実行し、いかなる逸脱をも許さなかった。

### 奴隷化教育強化に向けた幾つかの措置

神学教育を整頓するため、石川四郎が神学院院長を兼任し、前院長の河村齋美も留任させた。渡部守成と日本ホーリネス教会牧師の平野一誠を講師に任命、新京の「弘報処」から鎌田正を出国させて学監とする。このようにして、石川は神学院を厳しく統制したのである。石川は金曜日ごとに新京〔長春〕から奉天〔瀋陽〕まで説教に通った。彼はかつて、聖書の物語、主人と僕、及び伝道者の関係を説く物語を借用して、現在のキリスト教牧師に課せられた神聖なる使命とは、「八紘一字」を宣べて「大東亜共栄圏」という新秩序を建設することにあると説いた。

『教化通訊』は、日本軍が侵略政策を宣伝するための反動的刊行物である。石川はこの刊行物上で、「大東亜共栄圏」や「大東亜新秩序」、「日満協和」や「唯神之道」、「八紘一字」などのファシズムの常套句を捲し立てた。そして、「唯神之道」とは天照大明神を中心としており、「日満協和」も日本を先頭に置き、「大東亜共栄圏内では日満こそが中心」だ等々、一連の侵略的誤謬を宣伝した。

「教化報国講演班」は、国策を宣伝する道具である。

1942年10月、傀儡の協和会は中央でも地方でも、宗教団体や教会団体による様々な「教化報国講演班」を主催した。教職者たちは民生部及び省・市・県などの教化委員に割り振られて「教化講演班」に参加し、農村から工場、鉱山に出向いて、表向きは慰問という名の下、農民や労働者に勤労・愛耕・増産・出荷報国などの講演を行った。信徒に向っては「時局を奉戴して民を訓ずる大詔」（傀儡満洲皇帝が日本の天皇に対する感謝と感化を述べた勅語）を講義し、日本の天皇と満洲の皇帝を仰ぎ戴き、日満一体・建国精神・王道主義など奴隷化思想を植え付けようとした。

教職者たちの親日思想を強化するため、1943年春に協和会は新京〔長春〕で「宗教教化団体中堅分子練成会」を主催した。参加者は、「王道楽土」や「共存共栄」といった決まり文句や軍国主義者たちが捏造した「皇軍必勝」などの戦況を聞かされたのである。会議では様々な宗教団体のリーダーを講師に任じて各々の教義を紹介したが、その中で侵略に利用できそうなものを探ったのである。

「練成会」の方法によって各宗教は宣教者を「再教育」しつつ、教職者と信徒伝道者を訓練したのであった。

「監獄伝道」は、日本が進めた奴隷化教育のために用いたもう一つの手段であった。各地の教会指導者はいわゆる「教化委員」に充てられ、毎週定期的に監獄に赴いて宣教し、獄に繋がれた政治犯や経済犯に説教して、彼等の反満抗日を悔い改めさせ、亡国奴たることを甘受せんとし

た。だが連中の願いに反して、その宣教は抗日英雄たちの闘志を些かも動揺させることができなかったのである。

「詔書奉戴」は、日本が奴隷化教育を実施するもう一つの手段であった。

1941年12月8日、日本軍は真珠湾を奇襲し、「太平洋戦争」が勃発した。満洲国の傀儡皇帝も日本に続いて英米に対して「宣戦の詔書」を発し、所謂臣民たちに忠誠を誓わせた。その後、毎月8日を「大詔奉戴日」と定めて、臣民に反英米、親「友邦」を指示した。その方法は、黄色い緞子に包まれた詔書の特製の箱に入れ、通常は部屋の指定された場所に黄布で覆って保管してあるものを、毎月8日になると信徒を招集して協和服をまとった教会責任者が箱から取り出して恭しく頭上に掲げ、壇上にいる他の指導者に手渡すものである。手渡された者はこれを仰々しく大声で朗読するのであるが、まさに茶番劇そのものであった。

### 財団法人満洲基督教会は日本のため死にももの狂いで尽力した

1944年2月1日、傀儡政府文教部の発令により、満洲基督教会財団法人という名の組織が設立された。2月28日には傀儡政府の法院に登録される。石川はこの財団の中で絶対的な権力を掌握し、その資金を好き勝手に浪費した。同時に、日本の「聖戦」のためにも積極的に関与した。鉄嶺と阿城の二箇所の教会病院を売却し、盛京医大病院、坤光女子中学校を傀儡政府に譲渡したのである。

1944年12月12日、石川は財団法人満洲基督教会理事会と監事会を召集した。会議の席上、石川は会長に発言を指示し、会長は次の通り宣言した。「時局は緊迫しており、わが満洲基督教会は国民教化の責任を負っている。国民を指導して国策を遂行し、大東亜共栄圏を実現させるべく、あらゆる国策の遂行において率先して行動し、全会員が一致協力して、宗教報国の赤誠を尽くすのである」と。この会議の要請に基づき、1945年4月20日、石川は教区長会議を召集して「教化五大運動」の方針を確定し、日本軍国主義の崩壊を必死に防止せんとしたのであった。

(一)「国民教化挺身運動」は、「国民思想の善導と強化」、「建国精神の明確」と「国体観念の昂揚」、及び「日満協和一徳一心の本意」や「民族協和と精神の徹底」、「大東亜共同宣言の徹底的な理解と実践」に注意すべきことを宣言したものであった。

(二)「増産報国運動」は、農業を発展させて穀物や野菜、ひよこ豆などを増産して、「聖戦」の需要に応えるためのものであった。

(三)「儲蓄報国運動」は、貯蓄に名を借りて民間の富を奪い、日本の戦時経済危機を補わんとするものであった。

(四)「必勝防空体制確立運動」は、1942年12月の理事会・監事会の席上で石川が提起したものであり、キリスト教徒は軍用機を献納するための資金として1万4000円を募金する旨を提起していたが、今回はこれを計画通り早目に完納するよう督促したのである。潰滅寸前の日本空軍のための輸血であり、同時にキリスト教の奴隷化を示す一つの成果なのでもあった。

(五)「国民道義確立運動」は、強制的に「国民儀礼」を実行させて、天皇と満洲国皇帝を愛し敬うさま、及び日本への親善を示すものであった。このようにして、日本と生死を共にせんという



卒業後の1919年から1920年に長春博文中学、1921年から1925年には吉林文光中学で専任教員を務めた。

キリスト教界での活動を見ると、1925年から1926年に吉林教会で佈道幹事を任じた後、1926年から1930年にかけて山東の華北神学院で学んでいる。満洲事変に前後する1930年から1932年にかけて營口聖經学校で専任教員を務め、満洲国時代の1939年から1949年は蓋県教会担任教師として働いていた<sup>1)</sup>。

他方、満洲基督教聯合会側の記録によれば、「蓋平県基督教教会牧師」のほか、「満洲基督教長老会大会教務委辦会特約員」、「營錦中会会副」、「營口教区董事会副会正」などの肩書が確認され、住所は「奉天省蓋平県」乃至「營口洋商会街聖經学院」となっている<sup>2)</sup>。要するにこの回想録が述べる期間、奉天(瀋陽)や新京(長春)といった満洲伝道会の中樞ではなく、蓋平(朝陽)という河北や内蒙古に隣接した都市を拠点に活動していたのである。したがって回想の内実について、恐らくは直接的経験よりも伝聞による情報が多いのではないかと推測されるのである。

共産政権成立後も、彼は遼寧に留まった。すなわち前出資料によれば、1949年から1957年にかけて瀋陽東関教会牧師、中華基督教東北大会理事長にあり、遼寧省基督教三自愛国運動委員会史資料研究員兼主任、中国基督教協会副主席・顧問を歴任、世俗面でも遼寧省政治協商会議常務委員を務めている<sup>3)</sup>。ここではその足跡を、より詳細に振り返ってみたい。

朝鮮戦争勃発直後の1950年8月には、瀋陽市中華基督教教会東関教会牧師名義で、「中国基督教在新中国建設中努力的途徑」(三自宣言)に署名している<sup>4)</sup>。翌1951年1月5日から9日にかけて瀋陽で開催された中華基督教教会東北大会理事会では、理事長兼東北神学院院长に選出された<sup>5)</sup>。そして、直後からの活躍には目を見張るものがあった。

すなわち1951年4月16日から21日に政務院文教委員会宗教事務処が召集して開かれた「処理接受美国津貼の基督教団体会議」に地域代表の資格で参加し<sup>6)</sup>、「中華基督教會東北大会理事長」の名義で、「中国基督教各教会各団体代表聯合宣言」に署名した<sup>7)</sup>。要するに、反米愛国基督者としての本格デビューである。1954年の第一届全国基督教会議において、孫鵬翁は中国基督教三自愛国運動委員会常務委員に当選した<sup>8)</sup>。

政権に寄り添うさまは、後の歩みにも確認される。1955年には、瀋陽市基督教三自愛国運動委員会副主席として王明道批判に参画し、『天風』誌上に意見を公表した<sup>9)</sup>。こういった貢献が権力側から認められたのであろうか、1955年11月21日には遼寧省人民代表大会代表の一員として、鞍山を視察した記録も残る<sup>10)</sup>。

1957年から1958年にかけて全国を席卷した反右派運動の渦中であって、彼も無傷ではいられなかった。遂に、右派と見做されてしまったのである<sup>11)</sup>。だがまもなく復活し、1961年8月24日に成立した遼寧省基督教三自愛国運動委員会において、孫は第二屆主席に就いた<sup>12)</sup>。その後も彼は平穩に活動を継続、1980年10月に南京で開かれた中国基督教第三届全国会議の期間にもたれた中国基督教三自愛国運動委員会第三屆委員会と中国基督教協会第一届全国委員会の全体会議において、孫鵬翁は第三屆中国基督教三自愛国運動委員会副主席に当選している<sup>13)</sup>。

なお、1933年には初学者向け信仰入門書とでもいふべき孫鵬翁撰『福音千字課』(漢口中國基督教書會、1933年)を出版している<sup>14)</sup>が、その信仰的背景を詳細に語る素材は、いまのところ発見できていない。

この文史資料記事が、はたしてどの時点で執筆・編集されたものなのか、日時など詳細は記されていないものの、反右派でいっとき批判されていた期間を除いて、孫鵬翁は一貫して権力側と近い距離にあり、晩年には国家機関の幹部として活躍していたのである。読者諸賢には、かかる立ち位置への理解を踏まえた上で、本訳稿を読み進めて頂きたいと思う。

※ ※

最後に、和訳の過程で気になったことについて、幾つか附記しておこう。

まず本稿には、数多くの欧米人が登場する。しかしながら原文においては、漢字表記名しか書かれていない。したがって一見しただけでは中国人か欧米人かの区別が付かず、訳者も非常に往生した次第である。どうにかして原名に辿り着くことができたが、なお不備が残存している可能性もあるだろう。

次に国家や地域については、原文における表記に従った。よって、キリスト教史では一般的に「スコットランド教会」や「アイルランド・ミッション」という如く表示されている箇所であっても、一貫して「イギリス」乃至「英国」と括られている。牧師であった孫鵬翁がこれらの差異を知らなかったとは思われないので、編集者による「訂正」を経た結果であろう。

また「日本帝国主義者」や「日寇」、「英帝」といった常套句について、読解上で特に強調する必要がないと判断した場合、ニュートラルな表現に改めて訳した場合もある。更に、あきらかな誤記や誤植については、適切なそれへと訂正した。いずれにしても、原著者の諒解が得られていないことは再度強調しておく。

訳文における欧米人名の表記、また原著者・孫鵬翁の経歴については、東北学院大学の渡辺祐子教授、金城学院大学の松谷暉介教授、中国神学研究院（香港）の宋軍教授、さらに衛理神学研究院（台北）の畏友・陳繼賢兄からの御教示によるところが大きい。翻訳自体の責任は訳者が負うところであるが、研究仲間からの御厚意に深く感謝の意を述べたいと思う。

余談ながら作業の過程で、李亞婷「偽滿時期日本對基督教的統治」（『偽滿皇宮博物院年鑑（2009-2010）』偽滿皇宮博物院、2011年9月）なる「論文」を読んだ。その展開や内容、細かい表現に至るまで孫鵬翁回想と見事に重なり、啞然とさせられた次第であった。

#### 註

- 1) 「孫鵬翁」（朱越利主編『今日中国宗教』今日中国出版社、1994年）272頁。
- 2) 杭之羸編『滿洲基督教年鑑』（滿洲基督教聯合会、1938年）256～258頁。
- 3) 註1と同じ。
- 4) 『人民日報』1950年9月23日、第1版。
- 5) 毋忠毅「遼寧基督教歴史的長老会（下）」、『福音時報』2023年11月28日。
- 6) 『人民日報』1951年4月16日、第1版。
- 7) 『人民日報』1951年4月25日、第5版。
- 8) 『人民日報』1954年8月13日、第3版。
- 9) 王長新『又四十年：王明道先生的口訴歴史』（多倫多〔トロント〕：加拿大福音出版社、1997年）88頁。
- 10) 『工人生活』第1694期、1955年12月2日、第1版。
- 11) 邢福増「反右派門争與中國基督教」（『二十一世紀』第164期、2017年12月）31頁。
- 12) 「遼寧省基督教三自愛國運動委員會」2016年6月12日（遼寧省基督兩会ホームページ、<http://>

- [www.lnjdlh.com/list.aspx?lid=3617f013-9832-4583-b37f-b25cf8b61495](http://www.lnjdlh.com/list.aspx?lid=3617f013-9832-4583-b37f-b25cf8b61495)：最終閲覧日は2025年12月10日)。
- 13) 「中國基督教三屆全國會議在寧舉行」, 『新華日報』1980年10月15日 (基督教中國宗教文化研究社資料目録 >Drawer 6B> 宗教 (剪報), 10-12/80 A0076467 : 香港中文大學圖書館, <https://repository.lib.cuhk.edu.hk/en/item/cuhk-3071101> : 最終閲覧日は2025年12月10日)。
- 14) その内容については, 國家圖書館が運営するデータベースの台灣華文電子書庫において, 全文が公開されている (<https://taiwanebook.ncl.edu.tw/zh-tw/book/NCL-9910006400/reader> : 最終閲覧日は2025年12月10日)。

(2025年12月10日 加筆)